



病 理 診 断 科

病理診断科
部長

深澤 雄一郎



はじめに

病理診断は、病気の最終診断であり、病院の診療には欠かせないものです。特に、癌の診療では、病理診断に基づいて患者さんの治療方針が決定されるといっても過言ではありません。病理診断は、通常各診療科の担当医師によって患者さんに伝えられるため、病理医の存在は一般にあまり知られていません。古くはアーサー・ヘイリーの小説「最後の診断」、最近では、海堂尊（彼自身も病理医です）の小説などを通して知っておられる方も多いと思います。

当科の概要

市立札幌病院では、昭和40年（1965）に伊藤哲夫先生を医長として中央検査科病理が新設されました。平成2年（1990）に病理科として中央検査科から独立し、政令改正後の平成22年（2010）に病理診断科として診療科の仲間入りを果たしました。現在、病理医4人（常勤3人、嘱託1人）で病理診断業務を行っています。部長の深澤雄一郎は、ただ一人50代後半で、日本でも数少ない腎病理医です。私以外の3人、辻隆裕、柳内充、藤田裕美は30代でこれからの病理を背負っていくホープたちです。

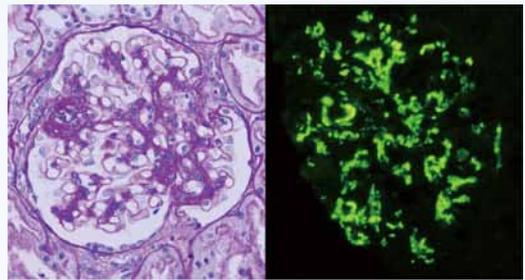
病理診断科は院内の全臨床科に対応しており、まさに人間のあらゆる臓器のあらゆる疾患の診断が求められています。また、免疫組織化学や遺伝子検索により分子標的薬の適応を決める役割も担っています。我々の診断が患者さんの治療方針に大きく関わっていますので、毎日、その重圧を感じながら診療に励んでおります。



左より：柳内副医長・深澤部長・辻副医長

当科の特徴

当病理診断科の特徴は、腎生検診断を専門にしているということです。当院の腎生検診断の歴史は長く、昭和47年（1972）に開始されています。腎生検診断では通常の組織診ばかりでなく、蛍光抗体法と電子顕微鏡検査が診断に欠かせないのです。開始された当時から、最先端の病理診断技術があったということです。現在では、院内の腎臓内科、腎臓移植外科ばかりでなく、地域の専門病院から多数の検体が送られてきます。年間900件、累積20,000件の腎生検は日本国内で有数の症例数です。



IgA腎症の組織像

これから

「病理医は患者を診ない医者である」という殻を破ろうと、患者さんにご希望があれば、患者さんに直接会って病理診断を説明するという事業を開始しています。目的は、患者さんが自分の病気をよく知っていたら、治療に対して前向きな選択をしてもらいたいということです。まだ事例は少ないですが、病理診断科外来を開設する前段階として研鑽を積んできたいと思っています。地域の先生方のお役に立つことがあれば、何なりとご相談ください。